

故 齋藤亥三雄先生を偲んで

卜部泰正 (大学名誉教授)



齋藤亥三雄氏略歴

一九〇五年二月二日生まれ。一九一九年京都大学工学部卒業。直ちに、東京市電気研究所に就職し、その後、一九四五年同志社工業専門学校教授。一九四九年同志社大学工学部教授、その間工学部長、理工学研究部長、大学長代行などを歴任され、一九七四年から一九七八年まで学校法人同志社理事長を務められた。一九七六年名誉教授。一九九〇年一月には、勲二等瑞宝章を受章された。一九九六年七月一日二時五分永眠。九〇歳

七月一日、齋藤亥三雄先生のご逝去を知ったのは講義を終え研究室に立ち寄ったときであった。

先生は同志社ご着任間もない頃に一時健康を害されたとのことであるが、その後は健康そのもので長い間の激務に耐え大任を果たして来られた。先生のお体は百歳まで大丈夫と医師から言われたことを奥様からお聞きしたのは、還暦をお迎えになった頃である。その先生も受勲された八十五歳を過ぎてから少しずつとも元気をなくして来られた。これは最愛の奥様が体調を崩されることの多くなつたせいではないかと、私には感じられた。卒業生のクラス会も、一九九三年の春にご夫妻で出席されたのが最後である。

九五年一月に亡くなられた奥様のご葬儀のときに先生と少しお話して以後は、

お会いするのを遠慮した方がよいような様子でそのままになってしまった。

私が初めて先生にお目にかかったのは五〇年三月、工学部三年編入試験の面接のときで、その三年半後に思いがけなく助手として同志社に帰ってからは、最初の数年間先生の研究室兼実験室に同居させて頂くなど、日々身近に接しご指導を受けた。発足間もない当時の工学部は劣悪な条件下にあり、先生はご自身のことを考えるどころではなく、その整備充実に心血を注がれる毎日であった。さらに、五四年の学生部長を始めに法人理事長に至るまで、次々に役職を歴任されて学内行政に多大な貢献をされた。数えてみれば長のつく役職だけでもご在職期間の三分の二になる。また、音響学会および通信学会の支部長に選出されて各支部の

活性化に道を開き、海洋音響学会の設立に際しては、国内における研究の先駆者としての衆望を担って初代会長に推され、六年の長い在任期間にわたって学会の基礎の確立と発展に大きく寄与された。訥々と飾ることなく仁に満ちたお人柄が、このように役職を重ねられるものになったと思われる。先生は表に立つことを苦手とされ、ご自分から望まれたわけではなかったが、一旦引受けた後は事に当たって一切の私心を捨て、良心をもって誠実に対処された。

先生の足跡をたどると、学生時代に受洗ののち道を求め続けて深められた確かな信仰に基づく、真のキリスト者としてのお姿が浮んで来る。今は、安らかに奥様と共に同志社のこれからを見守って下さるよう祈るばかりである。

故 吉武堯右先生を偲んで

今井俊一（大学名誉教授）



吉武堯右氏略歴

一九一八年八月一日生まれ。一九四一年東京帝国大学経済学部を卒業後、西日本生産科学研究所副所長、福岡商科大学教授、福岡大学商学部教授。一九五七年同志社大学商学部教授、人文科学研究所所長、商学部長などを歴任された。一九八八年名誉教授。一九九六年八月一二日四時三〇分永眠 七八歳

本学名誉教授吉武堯右先生は去る八月一二日未明、膵臓癌のため逝去された。ほんとうに淋しい。

吉武さんを生じ上げたのは終戦直後の昭和二三年の秋頃であった。その頃日本経営学会の大会で吉武さんは「経済変動と賃金体系」というテーマで報告された。その内容に痛く感銘をうけた私は、以来『福岡商大論叢』などに次々と発表された論文を読み、九州産労などにおける文化的な啓蒙活動をされていた先生にますます学ぶことが多かった。

昭和三十年頃から大学院博士課程商学研究科を設置しようという機運が高まり、吉武先生に移籍して頂くということになった。

福岡大学への折衝には当時学部長であった吉川秀造先生が当たられるなどされ、吉武さんの京都移住の決意が固まっ

たようである。もとより私は喜び勇んで博多の吉武家を訪れ、その晩はお宅に泊めて頂くという恩義に与った。その日は忘れ得ない一日だった。

爾来、同志社生活を共にすること三十有余年の間、いろいろなドラマが展開したが、吉武さんは常に核の一つであろうとされた。吉武さんの行動の範囲の拡がりや人生についての洞察の深さとは相互に関係し合っていたのであろう。長いお付き合いのなかで、私が感得したものは吉武さんの一側面でしかなかったような気がする。その中で昨日のことのように鮮やかに思い出されることがある。

那須温泉の霧の宿で夜を徹して語り明かしたことである。丁度その翌日は、東北大での会計研究学会が予定されており、お互い上野で待ち合せて那須温泉に着いたわけである。湯につかって疲れを

ほぐしたあと、盃を片手にととうとう夜明けまでしゃべりまくった。人生論、芸術論、大学像の問題から研究者の姿勢、労働運動の問題など縦横無盡に上機嫌でしゃべりまくり、ときには民謡に手拍子を打ちならすなど、お互いに意気軒昂たるものがあつた。しかしその時、始めて吉武さんに畏怖の念を感じた。その星をちりばめたような一種玄妙な言葉の綾でいろいろな問題をつなごうとする姿勢にいしれぬ感覚をおぼえた。それはカリスマ的であつてそうではない、仏教的であるようでそれでもない。何かいいしれぬ力で共鳴を引く張り出される感じであつた。

先生についての思い出はつきない。先生の同志社のみならず社会に残された足跡はあまりにも大きい。先生の御冥福を切に祈る。

故林 淳一先生を偲ぶ

小原弘之（女子大学教授）



林 淳一氏略歴

一九三一年一月一六日生まれ。一九四五年度京都大学理学部卒業後、同大学理学部助手、福知山工業専門学校講師を経て、一九五九年同志社女子大学助教授。一九六三年同教授。一九六八年同大学院家政学研究所教授、その間、家政学部長、家政学研究所科長、教務部長などを歴任された。一九九三年名誉教授。
一九九六年一月一六日一五時四四分永眠 七三歳

平成八年十月十六日、林淳一先生が急逝された。前日まで今出川キャンパスを

元気に歩いておられただけに我々は大変驚いた。林先生は昭和三十四年四月、それまで在職された京都大学理学部化学科から、本学の助教授として赴任され、無機化学を担当された。昭和三十八年に教授に昇任されてから、三十数年間にわたって、家政学部あるいは家政学研究科の発展に尽力された。特に、学部長として、家政学部の創設期に格段の努力をされ、今日の基礎を確立された功績は大きい。

林先生は、家政学部の教職員、学生、卒業生を結ぶ同志社家政学会の設立には会長として精力的に活躍されている。年一回の大会開催、学術誌『同志社家政』の刊行、『家政学だより』の創刊、見学会あるいは研究会の主催等、現在行われている学会行事の原型は、先生の会長時代に

形作られたといっても過言ではない。改めて先生の御尽力に感謝したい。

林先生は、学部化に伴って、食品物性を新たに担当され、京大時代からの研究テーマであった金属単結晶の磁気抵抗効果や熱伝導等の研究を、小麦粉等の食品あるいは食材の熱伝導等の研究に展開され、食品研究に新しい視点の導入を試みておられる。同時に、京都という地の利を生かして和菓子の歴史や物性に関する研究も始められた。落雁の研究には特に興味を持たれたようである。何かの会合で同席した時、「同志社女子大に京料理を研究する講座があってもよいですね」と話しておられたのを思い出す。林先生とは本学総合文化研究所創設期の三年間、プロジェクト研究を組ませて頂いた。「たべものの文化考」というテーマで、先生は「菓子の歴史」という研究を分担さ

れた。京都の老舗の和菓子屋に保存されていた古文書を丹念に調査された興味ある研究であった。さらに、その後の研究テーマには食品官能検査論が加わっている。

林先生は常日頃、同志社女子大学の在り方として、「キメ細かい手作りの教育」を主張されていた。「規模の大きい同志社大学と同じ教育の仕方では絶対に勝てない。寧ろ、規模の小ささを生かした教育環境をつくるべきである」とおっしゃっていた。この考え方は多くの女子大教職員に共通する考え方だと思う。もう少し長生きして頂いて、我々現役の教師達が道を誤らぬよう御意見番を続けて頂きたかった。しかし、先生をもう今出川キャンパスで拝見することはできない。淋しい限りである。

主の平安のうちに

—久永省一先生を偲んで—

佐伯幸雄 (同志社教会牧師)

久永先生は二月七日未明、永眠された。この時期、同志社教会は学園の創立百二十一年記念式典、同志社教会創立百二十年記念式典と記念行事が目白押しに続いた。かううじて空いていた二月五日の日曜礼拝の日が先生の告別式の日となった。それは久永先生の学校と教会の諸行事に対する配慮と共に、とりわけ同志社教会の百二十周年記念式典を心の中で追いつつ、霊でもって共に参加しておられる姿を強く感じた。

先生は永い年月をかけて、故加藤延雄先生と共に同志社教会の明治期の歴史の編集に当たられ、それを「新島襄と同志社教会」という本にまとめられた。

先生は必ずしも話上手な方ではなかったが自ら、書くことは好きだ、と仰しやるように、その文章は流暢であり、その随所にロマンチストとしての先生の思

いと表現がうかがわれた。

先生は中学校長の任を終えられた直後より、同志社に纏わる人物の写真を求めて、全国さらに外国にも足をのばして蒐集され、その写真集は七十冊のアルバムにも達している。

恐らく、先生はこの莫大な写真を整理して「写真で見える同志社の歴史」とでもいう本を作ったかたのではなかったかと思われる。

小生も先生の教えを受けた一人として、様々な思い出があるが、その独特というか、かなり一方的でありつつ、ロマンチストとしてのユーモアを触れ合いのあちこちに見ることができた。

一九八〇年代に入ってから、同中時代がそうであったように、教会学校の由良キャンプには必ず参加され、水泳帽をかぶり、子どもたちと楽しそうに交わり



久永省一氏略歴

一九一一年四月二十四日生まれ。一九三六年同志社大学文学部卒業。一九三九年同志社中学校教諭に就任。その後同志社高等学校教諭を経て、一九五九年同志社中学校長に就任。一九六五年には永年勤続者として表彰を受けられ、一九七七年三月定年退職。
一九六六年二月七日三時一〇分永眠 八五歳

泳いでおられた姿は今も強く印象に残っている。

たしかに、先生は強い個性をもった教師だった。それが或る時には誤解を生じ、対人関係ではぎくしゃくしたこともあった。しかし、こと生徒に対する細かい思いやりに関しては、ユーモアと愛情を豊かに接する先生でもあった。教会でも、子どもにはやさしいおじいちゃんとしてとめられていたが、大人同士の関係では必ずしも温和ではなく、しばしば感情をむき出しにされたこともあった。それは先生の一方的とも思える正義感が働いて、妥協を許さなかったのではなかったかと思う。先生の霊が主の愛の中に平安であれと祈る。

故 覚前陸夫先生を偲んで

小林眞造 (工学部教授)



覚前陸夫氏略歴

一九〇二年六月三日生まれ。一九二五年京都帝国大学工学部卒業後、日立製作所研究所課長などを経て、一九四五年同志社工業専門学校校務兼機械科長に就任。一九四九年には同志社大学工学部教授。一九五五年には同大学院工学研究科教授に就任。工学部長、理工学研究so長などを歴任された。一九七三年名誉教授。一九七五年四月は勲四等旭日小綬章を受章された。一九九六年一月二七日一四時永眠。九四歳。

初めて覚前先生にお会いしたのは、私

が同志社大学機械学科の二回生になって、先生ご担当の「材料力学」の講義を受けたときであった。先生は大学ご卒業後約二十年間企業にお勤めになったこともあって、企業人と研究者の両方のタイプが先生の中に共存していたのであろうか、瀟洒な会社の重役さんという印象を受けた。先生の講義は実に精細で、わかり易く、材料力学への理解を深めることができた。先生は大正十四年に京都帝国大学工学部ご卒業と同時に田中機械製作所という会社に入社され、その後安治川鉄工所、日立製作所ご勤務を経て、終戦の年の十二月に同志社工業専門学校の教授として着任された。そして一九四九年から定年まで同志社大学工学部教授として勤められた。日立製作所では起重機的设计などを担当しておられたが、同志社

でのご研究は主として、構造物に荷重が

作用したときの各部材に作用する力の大きさと分布の解析、ならびに棒材や板材を成形加工するときの力の解析に関するものであった。それらは弾性力学あるいは塑性力学と呼ばれる分野の研究であるが、先生の研究の特色は、力学的解析手法の中に、高度な数学的手法を取り入れられたところにあつたといえる。先生は常に研究の獨創性ということを強調しておられ、ご自身の理論の中に獨創性を見事に織り込まれていた。その業績が学界で高く評価されていたことは、先生が日本機械学会関西支部長、日本塑性加工学会関西支部長などの要職に就かれてご活躍になっていたことから十分に推察できる。また同志社学内でも工学部長、理工学研究so長などを務められ、工学部発展のために指導的な役割を果たしたのであ

る。

先生の趣味の一つに語学の学習があつた。その熱意はすごいもので、六十代半ばになられてもなお、マレーシア、タイ、インドネシアなどの留学生をご自分の研究室に呼ばれ、大きな声で発音の練習をしておられたのが廊下まで聞こえていた。「読み書きならば二十七ヶ国語、話せるのは六ヶ国語位かな」とおっしゃっていたのを憶えている。

先生が同志社大学を定年ご退職のとき、偶然にも私がそのあと先生の研究室を使わせて頂くことになり、その時に先生から戴いた昭和九年岩波書店発行の、定価二円五十銭のポケット型機械工学便覧と木製の丸いテーブルを、今は亡き覚前先生の遺品として大切にしたいと思っている。先生のご冥福を心からお祈りし、追悼の稿としたい。